

朝鮮半島の南北分断と「敵対双方」の観光化

崔吉城

はじめに

われわれは国際化時代においていろいろな面で越境することが多い。そのたび毎にさまざまな国家、あるいは国境があることを感ずる。国境はもともと「境」意識から形成されたものであると思う。山、川、山頂など自然的地形によるものであり、人工的なものとしては塀、門、壁、城などがある。近代国家以前においては一部の王国の鎖国政策を取った国を除いて国境はあっても比較的、越境できるものであった。しかし近代国家の成立、あるいは植民地によって国境は直線になり、それをめぐって対立したり葛藤が起こったりするようになった。東西ベルリンの分割線、ベトナムの 17 度線、サハリンの 50 度線、朝鮮半島の 38 度線により国境が直線になった。そもそも国境は山、川などの自然な地理的なものによってなされているものであり、それらは自然な曲線であるのが普通である。しかし植民地や協定により作られた国境は直線であり、不自然である。しかも鎖国や冷戦時代の国境は直線であり障壁であり、それを越えること自体が死を意味するものであった。

第二次世界大戦の終戦などにより引かれた、ベトナムの 17 度線、朝鮮半島の 38 度線などは民族分断の悲劇的なものである。しかしベルリンの分割線、ベトナムの 17 度線は統一により消えたが、朝鮮半島の 38 度線は休戦線に変わり存続しており、南北対立が続いているのである。38 度線はポツダム宣言により軍事分割線として直線で引かれたものである。それは日本植民地の負の遺産であり、韓国人が一般的にこの 38 度線の悲劇を日本のせいだと考え、怨念を持っていたことは当然であろう。しかし 38 度線は休戦線によって修正されており、直接的に日本に恨みを持たないようになった。休戦線は国連軍、ソ連・中国軍の支援を得ながら朝鮮族同士の間で戦争により新しく作られたものである。そして南北の対立、米朝の対立になったのである。板門

店はその対立点である。

一. 38 度線と休戦線

韓国の高速道路にある安全運転の標語で「居眠りしたら死ぬ」というものがある。危険であるということをおまわりにも過激に表現をして「死ぬ」といっていると思いつつ、北上して休戦線地域を走ると「道からはずれると」「過速すると」など「何々をすれば死ぬ」という標語がより頻繁に現れる。この標語は休戦線を警戒している軍人のためのものである。おそらく安全運転の標語もこの地域の標語から来たものではないかと思われる。休戦線地域は交通安全よりもより強い緊張感を感じる。夜間、歩哨兵が居眠りをしている時、北朝鮮から侵入してきて鎌で首を切られたというような話を聞いて驚いたこともある。

38 度線は 1945 年から 1950 年まで存続した。1950 年朝鮮戦争が勃発するまでは 38 度線は地図上に引かれた直線であり、それほど実感のないものであった。軍隊は駐屯してもそれほど緊張感はなかった。私は子供時代に 38 度線付近の軍隊を見に行ったりし、朝鮮戦争の勃発の日曜日にも見物する予定であった。当時、冠婚葬祭などに人々は南北分断の 38 度線を往来し、父は 38 度線を行ったり来たりして牛の売買をしていたし、隣の東頭川というところは国境の町として発展しつつあったので 38 度線はそれほど厳しく統制されたものではなかった。しかしそれが朝鮮戦争によって修正され、死の障壁のように変わったのである。

1950 年 6 月 25 日の日曜日の朝、砲声の轟音は天地を裂くようであった。北朝鮮の侵入が始まり、38 度線は無用のものになった。1953 年 7 月 27 日休戦により 38 度線はいわば「休戦線」に変わったのである。その休戦線はそれほど変わったものではなく、西部が下がり、東部が上がったように、東部から西部へ斜めになったのである。つまり朝鮮半島の南北分断の 38 度線が朝鮮戦争によって修正されたのであり、これは悲劇の直線である。その 155 マイルの休戦線はその後現在まで存続している。南北の分断線としては 38 度線とそれほど変わりはないといっても、その意味は非常に異なる。38 度線は日本植民地を終息させるために国連によって生まれたものであり、休戦線

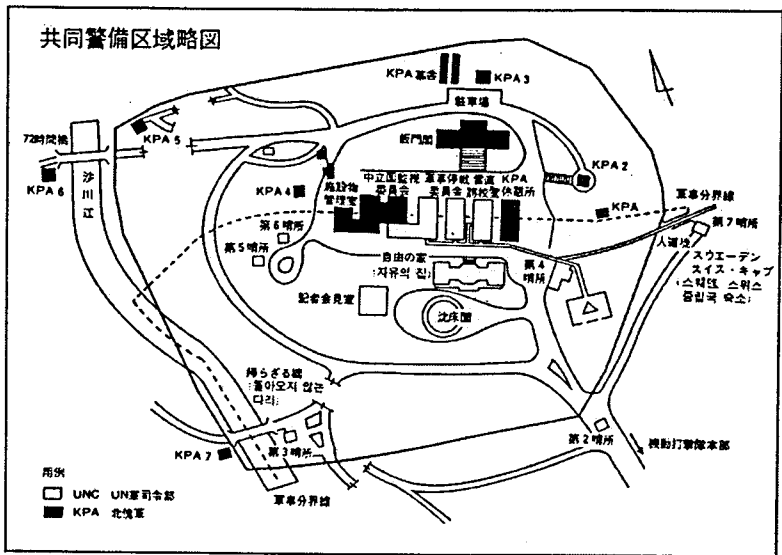
は南北戦争によるものである。38度線の恨みが日本と国連にあるならば、休戦線の恨みは同一民族である南北の朝鮮民主主義共和国と大韓民国にあり、米国やソ連、中国にもある。休戦線をめぐって敵対意識を強く持っている。

広く考えると休戦線は冷戦時代の共産社会主義国家と自由資本主義国家との鉄のカーテン、つまり朝鮮半島の休戦線は危険極まりない死線とも呼ばれる。戦争中の南北軍隊の対立した戦線は軍事分界線であり、休戦によって定まったのが休戦線である。155マイルの休戦線は地雷の糸で編まれた鉄条網と塀によって二重三重にガードされている。それを基点として南北それぞれ2キロずつの地点の南方限界線と北方限界線が引かれている。その4キロの地域がいわゆる非武装地帯であるが実は南北の「武装の対立」の地帯といえる。私は1966年陸軍士官学校の教官になるための訓練中にその非武装地帯を歩き回ったり、夜間警備をしたりしたことがある。その時、眼鏡を外すように注意されたことがあった。なぜなら眼鏡は角度によって光が当たって光ることから敵の標的になりやすいからだということであった。その時北朝鮮側の非武装地域を覗いてみたことがあるが武装化されており、「休戦線死守」ということを痛感したものである。

悲惨な朝鮮戦争のあった韓国にとって休戦線の危険性は韓国全体を緊張させる力を持ち、それは政治的に利用されたりした。「反共」は韓国の最大の国策であり、独裁政権が多いに敵意識を利用するものであった。またスパイ事件などにより東海岸には鉄条網がめぐらされており、政府は軍事防衛上の安全を「鉄桶のように水も漏れないほどに」と強調したりした。その嚴重な死戦を越えて侵入してきたスパイが射殺されたニュースもよく報道される。朝鮮半島は半島と言われるが韓国は四面海の島より悪条件の三面島のような国である。その一面を占めている休戦線は死線か地獄のようなものになっている。

両民族は統一を願っているが、いろいろと軍事、政治などの問題を起こした。それは常に相手国を自国に統合したいという、つまり武力統一の潜在性を強く持っており、この武力統一が即ち戦争への危険性に繋がる。スパイ侵入、拉致などは国民を緊張させる。軍事政権はそのたびに政治的には安定感を強めることが出来た。時には政治的にそれを利用することもたびたび

あり、国民はそのような危機的なニュースにも少しずつ鈍感になった。何年か前に北朝鮮がダムを放流して韓国を洪水化するというのを報道して国民を驚かせたことがあったがそれは事実ではないことがばれたこともある。また北朝鮮は休戦線の下にトンネルを掘ったと発表し、それを観光化している。このように休戦線は冷戦時期を通して現在まで最も厳しい緊張感のある死の線である。その緊張の接点が板門店である。つまりそれは朝鮮半島の分断、共産社会主義と自由資本主義、ソ連ブロックとアメリカブロックと敵対関係の接点であり、イデオロギーや武力の二分構造の境界線である。



出典：<http://www2a.biglobe.ne.jp/~hideyuki/korea/38/38.htm>

二. 危険な商品

人は危険を避けようとする一方、ある程度の危険を冒険しようとする。ホラーものが流行するのもその例であろう。板門店観光は国境の危機感を商品化したものである。板門店は北朝鮮の開城の東 10 キロ、ソウル北方 48 キロ

の地点であり、短い直径 800 メートルの楕円の中央に休戦線が横たわっている区域である。この区域は敵対軍隊が「共占共有」している地域であり、それは世界唯一のもといわれる。1976 年北朝鮮の軍隊の斧振り事件以後警備だけは分離するようになった。ここには中立国監督委員会の本部が設置されており、スウェーデン、スイス、チェコスロバキア、ポーランドからの監視委員が常住している。1951 年 10 月から 1953 年 7 月まで国連軍（アメリカ軍）側と朝鮮民主主義人民共和国・中国人民支援軍側とが休戦会談を行い、現在も連絡会談、南北対話が行われる所である。

「軍事停戦委員会」は協定調印により定期、非定期的に行われている。会談以外に拉致人、捕虜などの送還と交換、スパイ侵入、暴力などが起きる場所でもある。大小の事件が起こる度に敵対意識が増幅されていく。長径 1 キロ弱の長円形の敷地はもともと朝鮮人民軍と国連軍双方の警備将兵が共同で警備する地域だったが、76 年 8 月ポプラの木の新伐採をめぐり、米軍将校 2 人が北側兵士に殺される事件が発生し、境界線をはさんで分割警備されるようになった。84 年 11 月には銃撃戦が発生、4 人が死亡した。しかしこのような危険なところが観光化されているのである。韓国や北朝鮮においても板門店観光は重要なコースである。

（1）韓国側からの板門店観光

板門店ツアーは皮肉にも韓国の名物ツアーになっており、観光客が多い。外国人向けのツアーなのだが、日本人が八、九割であり、後の残りが欧米の人たちで、特に男性が多い。このツアーは外国人しか参加できないので外国人向けの観光商品である。インターネットには旅行の感想が多く載っている。以下インターネットより紹介してみる。

板門店のツアーは定員が 50 人前後で一日 1 回しかない。バス移動が大半だ。だんだんと道を進んで行くにつれて、人家が少なくなっていく。そして、ついに非常用のバリケードとなる建造物をくぐった。説明によると、国道に数カ所ある水門のようなブロックでできた門は、北の軍隊に攻め込まれたときに落として、道をふさぐ役割をするという。途中フィリピン軍参戦記念碑、韓国軍従軍記者追悼碑、肉弾十勇士忠魂碑を見学、京義線の終着駅であ

る汶山駅を横手にこの先は線路が途切れている。しばらくすると民間人統制区域（民間人統制線）の前の臨津閣に着く。臨津閣で国連軍のセキュリティチェックがあり、数分後臨津江の「自由の橋」を渡り板門店へ行く。ここからは景色が一変し、戦車やジープ、地雷危険の看板、機関銃を持った兵士などなど物々しい。数分で板門店国連軍キャンプに到着する。この場所は韓国人が来ることのできる最北端の場所である。韓国の離散家族の人々が多数詰めかけていて、ここへ来て展望台から北を熱心に眺めて北にいる家族のことを偲ぶという。ここへ来ると南北分断の悲劇を直視することとなる。写真の上に「亡命したがっている日本人観光客」というタイトル付きで北側のプロパガンダに使われるものもある。非武装地帯には特別に許可された農民たちが国境紛争の危険と隣り合わせの生活をしているという。同じ様な村は、北側にもある。

バスは板門店へ進んでいく。すぐ右手に、北側の監視塔が見えた。国連軍のキャンプに到着し、昼食をとり、板門店の様子などが描かれたスライドを見て、そこで、これから起こることに関して責任は問わないという宣言書にサインをする。つい数日前にここを担当していた兵士が、韓国側に亡命してきたという。北側にも、同じように観光客が見学する板門閣という大きな建物があり、兵士が立っている。

バスを降りて、ちょうど休戦ライン上に建てられた五つの会議場の一つで、韓国側が管理している建物に入っていく。この中は唯一北側に足を踏み入れることができる地帯である。ここに韓国側の兵士が直立不動で構えている。

会議場を出て、再びバスに乗り込み板門店が一望できる高台へと登る。ここからは板門店のみならず、遙か彼方にはケソン（開城）の街が見える。バスに乗って「帰らざる橋」の手前まで進んで引き返してくる。この橋は名前通り、一度渡ると二度と帰ることができないという。

またある人は「板門店内はおもいのほか国連軍兵士は明るかったが、韓国軍兵士は境界線付近、および南北議会所では直立不動の姿勢のまま少しも動かさず、表情も変えない。その様子は、戦争を行っているのだと、実感させられる。ガイドは非武装地帯について“韓国で一番安全でリッチな場所”と言っていたのが、印象的であった。日本では決して味わえない、緊迫感がある。

ここは現在まで朝鮮半島を2つに分割する境界線だ」という。休憩後は映画を見させられるのだが、中身は人民軍（北朝鮮）は憎く、国連軍（ほぼアメリカ）は英雄視しているような内容であるという。会議場周辺は北（兵士）に向かって笑ったり手を振ることは禁止している。北のスピーカーからはガンガン音楽が流れてうるさい。山肌には反米の文字が刻まれているという。

（2）北朝鮮からの観光（開城・板門店観光）

北朝鮮観光へ行った人が出しているインターネットにより紹介する。

朝鮮旅行へのインターネット文では戦争準備だとか、食糧不足で餓死寸前だとかいう南側（韓国のこと）の悪宣伝を聞いているでしょうが、真実を御自分で確かめることを前提として、「板門店で朝鮮半島を分断しようとする米帝国主義者の姿を見てください。この会議室の向こうは南朝鮮です。同じ民族なのに米帝国主義者が分断し、植民地扱いにしているのです。私たちは皆様に万が一のことがあれば大変なので警護しているのですが、米兵と南朝鮮兵は皆さんを敵扱いにして写真を撮っています。彼らのほうが恐ろしいという事がここに来るとよく分かるでしょう。彼らは停戦協定違反ばかりしています。アメリカが朝鮮半島から出ていかない限り、板門店は主席の祖国統一遺訓を貫徹するための集会所です」といつている。

ある日本人旅行者のインターネット文を引用する。朝食後、バスに乗って、高速道路を南に向けて出発した。板門店のすぐ北に位置する開城の街に近づいた。開城は高麗の首都であった。「高麗は朝鮮半島最初の統一国家であるので、南北統一が実現された暁には、国名を高麗にするつもりです」とガイドが説明した。開城から更に南下し、検問所の数も増えてきて、徐々に物々しい雰囲気になってきた。道路の両側には南方に向けて戦車が多く配置されていた。午前中には中国人観光客の団体でごったがえしているの、開城で暫く時間を潰してから板門店に向かうことにした。非武装地帯に突入する手前に、「ソウルまで 70 km」という道路標識が立っていた。非武装地帯の中では、軍人さんによる説明を聞き、朝鮮戦争時に会議などで用いられた建物をいくつか訪れた後、ついに、板門店に到着した。韓国側からは、韓国軍と在韓米軍の兵士が双眼鏡を覗いたりしながら、ピリピリした顔をしてこちらを

警戒している。ガイドは、「アメリカの陰謀により、東欧の軍隊が板門店からの撤退を余儀なくされたので、現在、この建物は、食堂として使われています」と、説明した。観光客は板門店の「軍事停戦委員会会議場」とか「帰らざる橋」などを見てまわる。

(3) ナショナリズムと観光

韓国と北朝鮮は、国家は異なっても同じ民族であり、それが外力によって分断され、朝鮮戦争を通して敵対するようになった。つまり国連の植民地終結と戦後処理、冷戦期のイデオロギーの対立、朝鮮戦争の傷（離散家族）などによって対立し、「敵対双方」になったのである。南北とも統一を願っているが、それが武力統一になるのではないかという危険性を持っており、常に南北は緊張している。その象徴的対立点が板門店である。そこが観光化されているのである。それを比較してみると次のような点が指摘できる。

第一に敵対意識が異なる。日本への恨みを持つ38度線が休戦線に代わり、その対象も変わった。韓国の恐ろしい「敵」は北朝鮮であり、北朝鮮の敵はアメリカと韓国である。板門店観光でフィリピン軍参戦記念碑、韓国軍従軍記者追悼碑、肉弾十勇士忠魂碑などを見学させることは朝鮮戦争を思い起こせるためであろう。京義線の終着駅が汶山であることや離散家族の人々が多数詰めかけていて、展望台から北を熱心に眺めていることの説明から南北分断の悲劇を確認させる。

北朝鮮はアメリカと南朝鮮を敵対している。特に主な敵はアメリカである。しかし戦争自体を強調せず統一と敵が、いかに恐ろしいかを強調する。「彼らは停戦協定違反ばかりしています。アメリカが朝鮮半島から出ていかない限り、板門店は金日成主席の祖国統一遺訓を貫徹するための集会所です」という。

第二に、板門店における南北の緊張感を商品化して観光地としたのである。つまり、板門店は軽くスリルとサスペンスを体験するような観光商品になっている。外国人しか参加できないことから外国人の特権のようなイメージもあり、外国人向けに観光化されている。圧倒的多数は日本人である。非常用のバリケード、国連軍のセキュリティチェック、危険と隣り合わせの生活で

ある大成洞、国連軍のキャンプでの昼食、北側から侵入を含む突発事故の際は責任は問わないと宣言書にサイン、北側の監視塔、北の兵士が韓国側に亡命するという話、十数メートルの距離に北側、休戦ライン上に建てられた五つの会議場、韓国側の兵士が直立不動で構えている姿（以上韓国側）、検問所を経て、「私たちは皆様に万が一のことがあれば大変と警護しているのですが、米兵と南朝鮮兵は皆さんを敵扱いにしている、恐ろしいという軍人による説明、朝鮮戦争時に会議などで用いられた建物、韓国軍と在韓米軍の兵士が双眼鏡を覗いたりしながらこちらを警戒している」という説明などは緊張感を物語る。

第三に休戦線での異常は韓国や北朝鮮の国民にとっては緊張そのものである。したがってその線は南北国民を緊張させる潜在的なものである。板門店はその緊張や緩和の窓口でもある。そこでの議論や事故などはマスコミを通してながれ、南北関係を一辺に緊張させることは多くあった。そこで「敵対双方」として敵対感が高まる。両国はそれを利用して国民を統合させ、それが独裁政権を支える。韓国の独裁政治はその緊張感を利用した。現在の北朝鮮も、恐らく韓国の独裁政権と同様であろう。

結論

国際化時代において国境は低くなっていく傾向がある。それが行政と地理的区分のような、たとえば県境のようになっていくのだろうか。私は中国とベトナムの国境の町であるランソン、中国と旧ソ連の国境都市の満州里、中国と北朝鮮の国境の豆満江、タイとミャンマーの国境などの地域を歩いたことがある。19世紀末には国境貿易の盛んであった（ウルフ、1994：24）中国とロシアとの国境都市の満州里の町並みは美観であって、ロシア人との国境往来の話もよく聞いた。旧満州の吉林省の図們では鴨緑江の向かいにみえた北朝鮮は無縁の対面のように冷たかった。国境を緊張せず歩けるところもある。しかし国境には危険性が潜在している。日韓の漁労線（李承晩ラインなども）、独島問題、尖閣列島などにも危険性が潜在している。こうしてみるとそのような国境がなくなっても民族間の境界は生き続け、今後も葛藤を起こしていくのかも知れない（Yinger, 1994：325-348）。

国境には二律背反的な感情が潜在している。一つは異なることの boundary, border の意識や敵対意識であり、もう一つは隣という親しみのある隣人の愛と別離のところ、「望夫石」(国境に立って夫の帰国を待ちつづけて石になったという伝説)が象徴するようなどころである。ポーランドとロシアの越境の警戒論が過去の悲劇を象徴する国々ある(永井、1992:80-88)。つまり愛憎のアンビバランスのところとも言える。板門店は民族統一の象徴的なところであり、同時に敵対双方の対立のところでもある。冷戦体制は崩壊しても、南北間の軍事的緊張は消えていない。板門店の観光はまだ続くであろう。

現在我々は飛行中に国境を越え、国境を直接に観ることは少ないが、入管や税関のカウンターの前で国境の厳しさを感じる。一般的に入国手続きはヨーロッパの国々に比べて日本や韓国は厳しい。それはそれぞれの国の事情や国家間の関係によるものである。しかし朝鮮半島の南北は厳しく意識する国境もない。板門店は国境あるいは関所としての機能は果たしていない。いわば危険なる死の線のようなものである。それを観光化したものが板門店ツアーである。従来の観光の資源は主に自然環境や歴史的遺跡などが注目され開発されていたが、韓国と北朝鮮は国境の緊張感を商品化して観光名所とした。ベルリン、台湾などでも軍事産業を観光化してはいるが韓国が緊張の観光商品化に最も成功したといえる。グリーンカーは休戦線の非武装地帯(DMZ)は善と悪のイメージされた境界線として、板門店が観光化されており、恐怖と冒険を商品化したものであるという(Grinker, 1995:31-40)。

韓国政府は北からのスパイを防ぐために、東海岸に鉄条網を張った。やはり国境は恐ろしいという恐怖感をもっている。その障壁にウィンドウがあることはまだ交流の可能性を持っていることを意味する。板門店は鉄の幕ともいべき障壁のなかのショーウィンドウとして機能している。その付近に生まれ育った私は38度線を普通の国境のように感じ、休戦線は恐ろしい死線のように感じる。北朝鮮も国民に敵対意識を高調させ、南から攻撃されるといふ恐怖感を利用して国民の統合を図っている(Armstrong, 1997:338-340)。境界が内部を決定していくというように休戦線が両国の中心を決定しているようである。しかしそこが観光名所として登場したのは皮肉である。

南北両国は板門店を通して南北の対立の緊張状態を以って国内的には国民統合を図り、対外的には「敵対双方」を宣伝しながら外交の基点としている。その対外的な宣伝に観光商品が生まれた。つまり韓国のナショナリズムと日本人の観光がマッチして出来あがったものといえる。韓国にとって観光は主に美しい自然や文化名所を売り物とし、板門店のようなところを観光化するとは考えなかったようである。板門店はホスト側にとってナショナリズムを宣伝する場所であり、ゲスト側にとっては観光商品として成り立った観光名所である。中国における毛沢東の生まれ故郷を観光化しているように（韓敏、1996：173）このような観光はホストとゲストが直接間接に出会って生じる社会と文化が商品として登場する特殊な生産様式である（全京秀、1987：16）。特に「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買する」（橋本、1999：9）日本人は最後のフロンティアであるアラスカのオーロラ観光のように板門店も体験観光名所の一つであろう（Abram, 1997：223-236）。つまり日常的な現実の若干反転したものを楽しむ観光であろう（山下、1999：30）と考えられる。

文献

- ウルフ、デヴィッド著、高尾千津子訳（1994）「シベリア・北満をめぐる中国とロシア」『周縁からの歴史』東京大学出版会
- 韓敏（1996）「中国観光のフロンティア」山下晋司編『観光人類学』新曜社
- 崔吉城（1998）「朝鮮戦争と韓国社会の変化」嶋陸典彦・朝倉敏夫編『変貌する韓国社会』第一書房
- 全京秀（1987）『관광과 문화』까치（『観光と文化』カチ）
- 永井清彦（1992）『国境を越える』講談社現代新書
- 橋本和也（1999）『観光人類学の戦略』世界思想社
- 山下晋司（1999）『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会
- Abram, Simone Jacqueline Waldren and Donald V.L. Macleod eds. (1997)
Tourists and Tourism, Berg.
- Armstrong, Charles K (1997) Surveillance and Punishment in
Postliberation North Korea, *Formations of Colonial*

Modernity in East Asia ed., Tani E. Barlow, Duke University Press

Choi, Chungmoo (1997) *The Discourse of Decolonization and Popular Memory: South Korea, Formations of Colonial Modernity in East Asia* ed., Tani E. Barlow, Duke University Press

Grinker, Roy Richard (1995) "The 'Real Enemy' of the Nation: Exhibiting North Korea at the Demilitarized Zone," *Journal of the Council for Museum Anthropology*, Vol. 19 No. 2, Fall 1995

Yinger, J. Milton (1994) *Ethnicity*, State University of New York Press